



TITLE:

階級の動學的考察

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 階級の動學的考察. 經濟論叢 1924, 18(4): 732-756

ISSUE DATE:

1924-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128157>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 八 卷 第 四 號

大正三十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論 叢

虞夏書に見^はれたる政治經濟思想……………法學博士 田島 錦治

階級の動學的考察……………文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論……………文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて……………法學博士 山本美越乃

時 論

不景氣と租税……………法學博士 神戸 正雄

說 苑

一子相續制度に就いて……………經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展……………經濟學士 森 耕二郎

雜 錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西山幾太郎) ○戸田博士を憶ひ

て(福田經三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上肇) ○戸田

博士と私(河田嗣郎) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪

市労働調査事業(關 二)

階級の動的考察

高 田 保 馬

私は今、階級概念を豫め決定する煩瑣の仕事をさける。それを私はかつて發表したる他の論文に譲る。今はたゞ、一般の常識的解釋に此意味のとり方を委せて、その變動の理論的考察を試みたいと思ふ。

あらゆる時代に階級は存在してゐる。併し、多くの場合、階級間には鈞合、然り勢力の均衡があつて、新しき事情の生ぜざる限り新しき變動は生ぜざるものである。たゞ何等かの重大なる事情が生ずると、階級組織は茲に何等かの變化を生ずるものである。私はこの變化する事柄を考察せんとするものである。之を今假によびて動的考察と云ふ。勿論動的の言葉は今日決して、この意味にのみ用ゐられてゐるのではない事は附言を要する。

この問題はかなり大きな問題なるにかゝはらず、少くとも純社會學の範圍に於ては、あまり取り扱はれてゐないやうに思はれる。注目すべき學說も、私の知る限りに於ては極めて乏しい。

この問題に關して私見を述べる前に、從來の學說に對して一瞥を加へて見たいと思ふ。反覆し

て云ふ、この問題については從來の學界に於て、別に詳しい意識的な回答は與へられてゐない。コント及びスペンサアの大なる社會學體系の中にはかうした方面の研究に觸れたる部分が勿論含まれてはゐるけれど、決して之を主題として、意識的に、之れに對して回答をしたものであるとは見られがたい。唯ブルツクス・アダムスの Law of Civilisation and Decay の中には、かなり明晰な答が與へられてゐるやうに思はれる。併しながら、これらの注目値する意見の外に、吾人の忘れる事の出來ない、研究に値する一つの學説がある。これマルクス及びエンゲルスの唯物的史觀である。この場合、此の歴史觀のすじみちを詳述する事をさけるが、たゞ次の如くに述べる。マルクス及びエンゲルスの歴史觀は歴史の進展の根柢に生産力ををいてゐる。即ち生産力に應じて生産關係が生ずる。この生産關係が政治、法律や精神的文化等の所謂『上部構造物』を決定すると。

而して多くの學者は生産關係を單に經濟としてのみ論じてゐるけれども、マルクス自身に於て既に屢々生産關係と云ふ言葉の替りに、即ちこれと同じ意味を表はす場合に、社會的關係と云ふ言葉を用ひてゐる。生産關係はマルクスにありて社會そのものを指すのである。

かくて社會の組織の一部分、極めて重要なものではあるが、その一部分たる階級關係は生産關係の中に包括せられてゐる。階級關係が生産關係に包括せらるゝ以上、それは生産關係一般と

同じく、生産力によりて支配せられ、生産力の變動が階級組織の變動を伴ふと見られる。然れども私は此見解をとり得ない。生産力の内容は假に階級關係の姿を決定するとしても、何人が此關係に於ける支配者的地位を占め何人が被支配的地位を占むるかを定め得ない。況んや此姿の決定と云ふ事も生産力によりて營まるゝに非ず。それは生産力の變動以前に存立する、又は現存の生産力の内容を離れて存立したる階級關係、云はゞ前代よりの遺産たる階級關係によりて決定せられる。更に進みて、生産力そのものも自己變動力を有する原動力ではなく、他の事情によりて定まる被決定者である。私は經濟史觀又は唯物史觀が精神的又は觀念史觀を破壊したる功績を認むるものゝ、その積極的主張に至りては今、階級組織の變動に關してみる限りに於ても、遂に賛同すべき理由を發見し得ない。

私は古來より行はれたる史觀即ちかの觀念や思想を中心として歴史が動くを見る史觀を假りに第一史觀と名づける。之れは哲學的立場よりすれば議論自ら別であるが、私の立つ經驗科學的立場よりしては、探る事が出来ない。

次に今述べたるマルクス・エンゲルスの所謂唯物史觀を第二史觀と名づける。然しこの史觀にあつては、今述べたる如く生産力そのものによつて、いろ／＼の社會關係が動くものとしてゐる。従ひて階級組織の變動は生産力の變動によるものとしてゐる。然れども私の見る所によれば生産

關係從ひて其中に含まるゝ階級關係を動かすものは、生産力そのものではなく、それには固有な基礎となるものがある。即ちこれを動かすものは生産力以外のものと見るのである。之を私は假りに第三史觀と名づける。

私の第三史觀と稱するものは、社會の、量、質的の組立をその考察の主眼とし、これが社會組織の一切の變動を決定すと見るものである。

即ち社會の全人口と云ふものは或る場合には同質的であり、或る場合には異質的である。而して或る場合は稠密であり、或る場合は稀薄である。この質と量との關係が變化することによつて生産力の關係が動いてくるが、之と相ならびて社會的關係も變動すると見るのである。生産力の變動が自發的に社會的關係を決定すとは考へない。

此小論文に於て社會の量質的組立が如何にして階級組織の變動を生じ來るかを詳細に論述するのは不可能の事であると思ふ。たゞ私の立場からして、階級變動の過程に對し大體上の考察を加へ、其究局に於て、かの量質的組立が其根柢に存することを明かにしたいと思ふ。かくて、私の論述は階級組織の變動の原理と云ふべきものを取扱ふ。

此議論に入るに先ちて豫め定義を約束して置かなければならぬ。先づ社會的勢力とは何であるか。一體、力又は勢力と云ふことには色々意味もあるが茲には略ぼ次の如くに考へる。

吾人は種々の方面に亘りて欲求乃至は意欲と云ふものを有つ、例へば自分の物質的生活を豊富にしたいとか、或は眞理を十分に探究して見たいとか、或は國家の爲に身を投げ捨て、働きたいとか云ふが如き、即ちこれである。今比喩的には、此欲求を吾人一人の圓を以て畫くことが出来る。吾人が各方面に於て欲求して居る其絶頂が此圓の周端に當る。そして我々は、その圓の中心に立つてゐる。然し吾人の能力には一定の限りがあるが故に、其如何なる方面に於ても圓の周端まで到達することは出来ない。例へば毎日百圓の收入を有する人がしてゐるやうな贅澤を自分自身もしたいと云ふことを考へても今の私としてはそれは決して出来ない。他の生活方面に關する要求についても同様である。結局吾人は意欲の圓周の中心に坐つて居りますから其各方面に手を延ばしても、自分の出來得る所の能力と云ふものは極めて限られて居る。従ひて吾人が實際手をこまかして居る所のは其圓周の中の極く小さな面積に止まつて居る。此自分の手が届く範圍、それを稱して普通に力と云ふ。従ひて、例へば藝術の範圍に於て私が或種の創作をなし遂げむと思つても作り出す事は出来ない。その成就することが出来ると云ふ可能性そのものを稱して今力と云ふ。併しながら今社會的勢力と名づけるものはなほ一段制限せられたる意義を有する。今假定したる此全圓周の中に二つのものを分けることが出来る。即ち其一部分に於ては吾人自身が他人との關係に於てなく吾人自身を満足せしめむことを希ふ。例へば私が藝術上の一定の創作をやり

たいと云ふ欲求そのものは他人との關係と云ふものに拘りない。神の恵みを受けむが爲に自分が祈りをするに云ふことに付いても同じである。併しながら之に反して自分が富を得て他人を動かしたり、一定の權力を得て世の中を支配し、或は一定の人に自分が尊敬されたいと云ふ如き種類の欲求に於ては吾人が他人の上に或働きを及ぼし他人に於ける一定の變化を求めると云ふ意味に於て、それは社會的に他人の上に及ぼす働きを求める欲求である。是等の種類の欲求に於ける所の可能を茲に社會的勢力と稱する。例を取りて述べよう。私が藝術上の作品を出したいと思ふ欲求に於て一定の可能を持つことは私の力であるが私の社會的勢力ではない。併しながら、私が其藝術上の作品を作ることに依りて、其時代の第一流の藝術家になり時代の人達の尊敬を得むとして、此欲求を實現する事が出来れば、それは即ち社會的の力である。斯る意味に於て社會的の勢力と云ふものを定義すればその社會的勢力の中には三種のものを數へることが出来る。

先づ其三つの種類を説明する前に二つの區別を考へて置く方が便利である。それは受動的「パッシブ」の社會的勢力と、能動的「アクティブ」の社會的勢力とこれである。「アクティブ」な社會的の勢力と云ふものは他人の服従を自ら進んで捉へる可能である。それから此「パッシブ」の社會的の勢力と云ふものは社會的の服従即ち外の人々の服従若くは從屬を見出す可能である。即ち他人が自分に従ふと云ふ意志を持つと持たざるとに拘はらず、之を何等かの方法に依りて是非從

屬させる、服従させると云ふ此可能は、即ち能動的なる力である。之に反して、自分に他人を服従せしめようとする努力は全くないけれども、他人が自ら自分に従つて呉れ、其従つて居る姿を見出す時にそこに自分の欲求が満足されて居ると云ふ此可能、之を「パッシブ」なる、即ち受動的なる社會的勢力であると云ふ。而して此服従を捉へる所の即ち「アクティブ」の力と云ふものを分ちて權力と並に富の力とする。但し此權力と云ふものは極めて廣い意味のものにして、普通に云ふ、權力以外、一定の地位或は力に伴つて居る所の特權、並に吾人が現在享受してゐる所の權利と云ふものを總て含んでゐる。而してその作用は云はゞ直接的である。なほ一は富の力である。是は直接に他人の服従を捉へるに非ざれども、此物質上の富の力を以て間接に、若し汝等が此利益を欲するならば余に従へよと云ふ意味に於て、他人の力を捉へる力である。

受動的なる社會的勢力とは何であるか。今の場合簡單に之を説明する。例へば非常に社會的地位の高い人がある時、吾人が其人の人格に輕蔑の念を抱かない以上は、なんだか一種思はず頭が下がる感じを持つ。其人が有し居る權力に由つて吾人を壓迫する譯ではなく、吾人が自ら進んで其人に捧げる服従がある、之を今威力と云ふ名を以て呼ぶ。或は又優秀なる藝術家がある場合に、吾人は自ら其人に向つて頭が下がるのを覺ゆる、決して其社會的地位又は力が吾人を壓迫するのではない。自ら頭が下がる。之を稱して威力と云ふ。是だけの説明を豫め試みたる上にて本問

題に入る。

一體吾人が他人に向ひて、進んで社會に向ひて、捧ぐる服従の程度には一定の限りがある。即ち吾人は一定の服従の分量を社會の全體に向つて捧げて居る。従ひて其個人の集りてなす社會に付いて云へば、全社會を通じて存し得る服従に一定の分量がある。此服従と云ふものは之を受ける所の社會の側から云へば即ち社會其ものが持つ所の力である。言換すれば社會には常に一定の社會的勢力あり、而して此社會的の勢力と云ふものは誰が之を作るぞと云ふに吾人が社會に向ひて服従する故にそれが存立する。即ち吾人が服従する事によりて云はゞ多少づゝの寄附をなしつゝ成立したる社會的の基本財産、(社會的勢力)があり、此基本財産が社會の總ての人々に之を分ち與へられる。反覆して云へば、吾人は自分の服従と云ふものを社會に捧げる、其捧げたるものによりて成立する社會的勢力を相分ちて吾人の社會的勢力の持分が定まる。其持分に於て大きいものは階級組織の上に於て高きものであり、少なきものは階級組織の上に於ける低きものである。經濟界に於て常に最少の勞費を以て最大の利益を得んとする原則の作用が認められる。しかし此原則は必ずしる經濟生活のみを支配する原則ではない。吾人は此社會に向つて常に幾分づゝの服従を捧げる、其之を捧げる時には出来るだけ少なく捧げむとするが、捧げたるものに由りて成立したる社會的の勢力を分享するについては出来るだけ多くを取らんとする。隨ひ

て力強きものは澤山を取り弱きものは少しを取る。其結果として此社會的勢力の分配が自ら行はれる。而して階級組織の變化とは然らば何を意味するか。其社會的勢力が豊富に與へられたる所の人から取り上げられて少なく與へられたる人々に與へられる事を意味して居る。その力は權力であるとも、或は富の力であるとも、或は一種の威力であるとも、問ふ所ではない。只近世階級の觀察に於て、富若くは所得の意義と云ふものが極めて大であるのは、其外の方面に於て平等の傾向が割合に著しく實現せられたるが故にして、換言すれば、身分の制度が廢れたる故にして、決して經濟的の事柄のみが階級の組織を決定する譯ではない。

然らば如何にして此階級の組織の變化が起るか。此點について、私は此社會的勢力の分配に於ける二の形式即ち意識的分配と無意識的分配とを區別しなければならぬ。此考へは今から十一年前に自分の頭の中に畫いたことであるが今日まで未だ發表する機會を有しなかつたものである。私が意識的の分配と茲に言ふものは何であるか。勢力分配の中心があり、其考に従ひ意識的計畫的に一定の姿に社會的勢力を分ける、これがその意識的分配である。例へば徳川幕府の時代に於て、重なる財産は何であると云へば即ち土地より生ずる收入である。それが如何に分配されたるかと云ふに、一方に於て權力の體統的組織があり、徳川將軍が上に位して三百諸侯が其下に居り、又下に武士町人百姓が坐つて居た。此權力組織に相應じて、地位高き者は何十萬石と云ふ豊なる土

地的收入を得、地位低き者は乏しき土地的の收入を得て居た。云はゞ、土地所得と云ふ殆ど唯一の所得が幕府の意向に従ひ、計畫的に分配せられてゐたのである。而して此分配は權力分配の姿に平行して行はれた。これは意識的分配の一例である。此意識的の分配に對して無意識的分配を考へることが出来る。それは一定の目的若くは一定の計畫に従つて分配をしない所の分け方である。何人の意識的計畫にも従ふことなく事物自然の道行に従ひて行はれる分配である。例へば今日に於て取引場を見る。しばらくの間に或人は百萬圓の儲けを得、或人は百萬圓の損失をする。それは一定の計畫に依りて分配が行はれたる譯ではない。何人も計畫に従はず何人の目的にも従はずして、或人は金持となり或人は裸一貫となつて行くのである。是は無意識的の分配の一例である。

私が考へる所に依れば、若し社會的勢力の分配に於て、意識的な分配のみ行はれると假定するならば、階級組織の變動なし、階級は固定して動かない。然るに種々の事情よりして、少くも此意識的分配に加ふるに、無意識的分配が行はれる。即ち何人の又は如何なる團體の計畫にも従はざる分配が行はれる。而して其分配の姿が意識的の分配の姿と相合一せず平行せざるに至る。此際私は一の新語を取入れた。それは野生的勢力である。ギイザアの用語であるが、私は多少異なる意義を與へる積りである。一定の社會に於て、社會的勢力の分配に關し支配的重要を

有する中心の意志、計畫より離れ、それとは獨立に、此意志から見れば自然的偶然的に、かの勢力がある點に集中する、それは種子蒔く人の意志とは獨立に、まかざる種子が野の中に生育するの興趣を同じくする。かくして、或る個人又は團體の手の中に集まり來る社會的勢力をこゝに稱して野生的勢力と云ふ。過去の歴史に於ては多くの場合、勢力分配の中心は國家である、國家機關の意志とは獨立に勢力のある點に集中する時、これを野生勢力と見る。

一定の階級組織が現存して居る時に於て、意識的に分配の行はれない勢力がある。是は無意識的の分配の過程に従つて分配せられる。従ひて其無意識に分配せられたる勢力は社會の種々なる部分（個人又は部分社會）に於て野生的勢力として成長する。さて、此野生的勢力がなほ微にして、意識的に分配せられたる、云はゞ公生的勢力の組織をみださぬ間はよい。此野生的勢力の集中點は往々にして、公生的勢力の微弱なる所である。然るにすべての勢力は自己利用の傾向を有する、自己の力を作用せしめて新たなる勢力を獲得せむとする。従ひて、或る點に野生的勢力が集中し而もそこに公生的勢力が著しく乏しいと云ふ事であれば、此度は其比較的に強い野生的勢力を利用して公生的勢力を獲得し増加せしめむとする、それは勢力の意識的分配の變革である、階級組織の變化である。此企の實現の爲には次の條件の存在する事を要する、第一、野生的勢力の分配の姿が公生的勢力の分配の姿と著しく相離れること。二者の平行し合一するほど變革の努力は生

じがたく又成功しがたい。第二、一點に集中したる野生的勢力が強くして十分に公生的勢力の組織に變革的打撃を與へ得るらしく思はるゝに至る事である。要するに、野生的勢力が其分配の姿に公生的勢力の分配の姿を適應せしめ平行せしめんとしてこれに打ちかつところに階級組織の變動を生ずるのである。斯く抽象的に述べたる丈にては理解し難い點もあるかと思ふので、次に一二の例に就いて説明したい。第一に説きたいのは佛蘭西革命を中心として歐羅巴に行はれたる近世的階級組織の實現である。當時の歐洲特に佛蘭西に於て土地的收入のみが唯一の所得であつたならば此新しき階級組織の實現、佛蘭西革命を中心とした變動と云ふものは行はれなかつたであらう。之を可能ならしめたるものは新なる富の集積である。其新なる富の力と云ふのは、即ち土地に依存せざる所の收入である、土地以外の、云はゞ資本に基いて得らるゝ收入である。

然るに此新に出現したる收入は如何にして分配せらるゝかと云ふに、國家機關の意思により定められたる計畫に従ひて、例へば俸給の如く、祿高の如く、誰それは一年にどれ丈を分配せられると云ふ譯ではない。只相互間の賣買取引により、従ひて或る程度まで自由なる競争によりて行はれる。人々互に自己の利益を追求し、自己の力によりて相接觸する間に自ら分配が整まれ所得又は收入の集中點が生ずる。而も此集中せられたる所の新なる富は本來意識的分配によりて成立したるものではない。云はゞ公生的勢力に非ざる所の野生的勢力である。換言すれば相互

の個人的交渉より生ずる新しき富の分配は意識的の分配に従はざるが故に従ひて土地を有せる大名若くは其外の人の手に入らざるが故に、勢力の意識的分配の組織よりして云へば弱者たるものに集まる。即ち封建組織に於ける身分の低きもの特に町人の手に富が一種の野生的勢力として成長する。若し社會的勢力の意識的分配が行はれて居る範圍内に於て、例へば權力の範圍内に於て此野生的の勢力の中心が後者と相應する丈の公生的勢力を有し、彼等から見て相當の待遇を受けて居るならば其處に反抗の争はない。併しながら一方に於て顯著なる野生的勢力の所有者たるものも、他方に於て公生的勢力、特に政治上の勢力に至りては何等與へらるゝ所がない。即ち意識的分配に於ては與へらるゝ所極めて空乏である。従ひて之が一種の反抗の運動を起した、其所有する野生的勢力を利用して公生的勢力を貴族から奪取せむとする試みが第三階級に於て考へつかれる。而して彼等の力は既に裕に從來の意識的分配に於ける優勝者を倒せるに足ると云ふ見込みがついたのである。茲にかの野生的勢力は自ら所謂自由平等博愛の旗印を掲げて此旗印の下に今日の所謂第四階級の勢力をも糾合し（何故に之を糾合し得たのかは別の問題であるが）封建貴族と僧侶とを壓迫し、かくて歐羅巴近世の階級組織は形成せられた。反覆して云へば、社會的勢力の無意識的分配が行はれ、その分配の姿が意識的分配の姿と相合一せざる所に所謂野生的勢力が成長して來る、而して後者が自己利用の道行により舊來の公生的勢力延いては意識的分配の姿を

も變革する。他の一例をあげる。それは現在露西亞に於て或程度まで成功したる運動である。此近代の社會主義的運動並びに其將來に關しても私は同様なる勢力分配のメカニズムを見る。此點に關して或は異論を生ずるかも知れぬ。前述の場合にありては、所謂野生的勢力としては巨大なる富の集中、非土地的収入の集積がある、其富力が舊來の貴族の權力を殺ぎ去つたと云ふことに何等の不思議はない。然るに、現在有産者に對して爭鬭的運動を試みつゝある無産者の手中には何等新なる富の集積はない、彼等は依然として徒手空拳、其勞働によりて衣食しつゝある、彼等に如何なる野生的勢力がありと汝は云ふか。これが起り得べき異論の要點である。然れども私は思ふ。富の力のみしか野生的勢力たり得ずと思ふのは誤りである。木來、富力は派生的性質のもの、其根據としては常に權力が横はる、云はゞ後者が前者の前提をなす。權力分配のある水準の上に生起する波浪が富の集積である。之を他の反面より述べよう。富力は社會的勢力として極めて微弱のものである。その根柢に横はる權力によりて如何様とも左右せられる。權力の分配の姿が容認する限りに於てのみ、富の分配の一定の姿が成立し得る。然るに今日に於ては、無産者の手中に富に於ける野生的勢力こそ見るべきものなけれ、此優勢なる權力に關して野生的勢力がむくむくと成長しつゝある。現代の無産者はよし、國家の公權を掌握せんとするも、其團結の威力を以て有産者に抗爭し之を壓伏せむと力めつゝあるのを見る。此點は如何にして説明すべきか。

思ふに機械の發達と共に分業が極度に行はれる結果、又人口密度の増加、特に都市に於ける集中の結果として、無産者と有産者との差異、生活のあらゆる方面に於ける懸隔は著しくなり、無産者内部、有産者内部に於ける類似は益加はり來つた。此道行の如何なるものであるかを詳説するのは今の眼前の問題から餘りに遠ざかる。兎に角に近代の争ふべがらざる事實として、生産力の増加に伴ひ無産者の經濟的地位も亦幾らか高まり來るとは云ふものゝ、それは決して有産者の富力の集積に及ばない。從ひて二者の間の懸隔は益々激しきを加ふるに至つた。之と共にまた、無産者の間に於ける同質性、即ち相互に種々の點に於て類似すると云ふことが極めて著しきを加へ來れるのを見る。而も他の階級との懸隔、同一階級内部に於ける同質性共に加はることによりて團結の勢を増したる無産者が今、都市に集中し、特に大工場に於て日常相接觸しながら生活する。茲に於て、一方に於ては有産者に對する反抗の念が加はり他方に於ては團結が益強まる。かくて無産者全體を通じたる力が成立するのを見る。これ即ち一種の權力である。一方に於ては成員たる無産者そのものに對し、他方に於ては他の階級のものに對して、間接的にでなく直接的に壓迫を加へ、其意志を貫き得る能力、それは普通に云ふ權力即ち國家の權力でなくとも、其本質に於てこれと同じき一種の權力たるを失はぬ。それは成員の捧ぐる服従よりして成立する。此服従は今の場合無産者が其團結の爲にする努力、集團に對する依存である。而して此權力は國家の意志

を離れ、その計畫よりは獨立に成立したる點より見て、明に一の新なる野生的勢力である。而も此新に成立したる野生的勢力の所在即ち支持者にありては、決して之に應するだけの公生的勢力が與へられてゐない。それは勢力の意識的分配に於て與へらるゝ事極めて乏しい。茲に於て野生的勢力の自己利用が生ぜざるを得ぬ。その活用によりて公生的勢力を得むが爲に意識的分配の組織に向ひて斧鉞を加ふる事となる。勿論此自己利用の計畫が十分見込のたゞない場合にはそれが實現されにくい。社會の進み行きにつれて、無産者の野生的勢力十分に加はり、勝利の見込づくに至りてその反抗の運動も亦顯著となる。多くの人はすべての反抗の運動は壓迫極度に達し弱者が最も難儀する時に生ずると考へるが、これは大抵俗見である。階級の反抗運動はむしろ弱者の實力、然り何等かの形に於ける野生的勢力の増加する所に加はり來る。此近代の社會主義的運動と雖も此一般原則から外れたるものではない。此運動はもとより今日まで、多くの社會にありてはたゞ一種の試みたるに止まる。然れども將來それが其到達せむとする所に到達する限り、そこに階級組織の變動が實現せられる譯である。

さて、以上述べたる丈を以てしては、私の提説はなほ確立せられない。私は生産關係、特に之の中の最も重なる階級關係の變動を支配するものをば、社會の量質的組立にありとなした。而もこれと野生的勢力との關係如何。これを明かにするに非ざれば、如何にして社會の量質的組立が

階級の變動を左右するかを知るに由がない。私は進みて、かの野生的勢力が如何にして形成せらるゝかを考察しなければならぬ。それが國家の意志又は計畫より離れ、自然的又は偶然的に成立すと云ふのは一面からの記述のみ、何等の因果的説明を與へたるものではない。然らば此野生的勢力は如何なる道行によりて、生起するか。それは前に、今日の無産者の運動を例として述べた場合より推知せらるゝが如く、分化と云ふことを以て出發點とする。今歴史の一時期に於ける或る社會をとりて考へる。其社會の成員は既に過去の分化によりて既に異質的のものとなつて居よう。その何れの部分たるを問はず、一部分のものが新なる分化によりて他の部分との間に新なる差異を生じ、新なる特質を得るとする。而してこれは常に社會の發達に於ける必然の道行である。此分化は職業の方面に於て行はるゝとも又は宗教、思想等の文化的方面に行はるゝとも、又は風俗慣習生活様式等の方面に行はるゝとも全く問ふ所ではない。他の部分のものから異なれるものとなる、そこに力の變動を伴ふ。分化したるものは何等かの力を得又は失ふ。今説明を簡單ならしめる爲に新なる力の得らるゝ場合のみを考へる。此力の増加は團結の進展によることもあるが、然らずして、成員個人としての富力の増加、種々なる能力の増進、地位の獲得に負ふこともある。要するに、個人として所有する力が加はるゝ事あり、その上に、又はそれと獨立に團結の力の伴ふのを見る。例へば佛蘭西革命前に於ける町人の如きにありては、彼等が個人として

既に新なる富力を得て居る。その上に、彼等の社會的勢力は、相互の團結によりて加へられたのを見る。然るに近代の勞働者にありては彼等が有産者に對する服従を差控ふることによりて、廣義に於ける各自の權力を加へたる點より離れて考ふれば、別に何等成員自身として新なる力を得たのではない。たゞ其團結によりて勢力を増進せしめてゐる。

さて團結と云ふ事を眼中に於て考へると、幾分重覆の憾もあるかなれど次の如くに思はれる。分化と云ふことは二つの結果を伴ふ、其一は内部の結束である。外のものから懸け離れて來れるものが相互に團結する事は自然の成行である。而も此團結したるものが、外部のもの、特にこれと利害感情の相容れざるものと相反對することの自なる勢である。此内部の結束と外部に對する分離との二者は相促し相伴ふ事柄にして、或る點までは二者互に因果をなす。外部に對する反對が激しければ内部の團結は強くなり、内部の團結が加はれば外部に對する所の分離反對も激しくなつて來る。

さて此團結はそれが一の相互保護を意味する點よりして既に力である。次に外部に對する反對が多くは、他に對する服従の差控を意味する、此差控は自ら他のものゝ權力を殺ぐことよりして自己の同類の權力に加へる所がある。終りに分化その事が成員の新なる力を意味する。即ち前述の如く、個人としての力を加へるのである。分化したる事によりて他の服従を新に受けることも

あり、又は分化は既に富力、權力乃至地位等の上昇を意味する事もある。何れにせよ、此三事情は分化したるもの、勢力を増加する。而も國家權力の掌握者がその以外に立つ以上、新に得られたる力は當然一種の野生的の勢力として成長すべき運命を有する。何となれば、それは國家の意志が計畫的に勢力を分配することを欲せざる成員の間に、たゞ成員の分化そのことより自ら成長し來るを以て必然的に野生的の勢力たらざるを得ないのである。而も國家の意志と獨立に成立し分配せられたるものであるが故に、その分配は意識的分配の結果と相衝突して其處に一つの争ひが起る。野生的の勢力の敗北に歸する時はこれ以上の變化は生じないが、その勝利が實現せられると茲に階級組織（此言葉は多義的である、別に詳論したいと思ふが）の變化が促されざるを得不得。新に勝利を得たる野生的の勢力はその自己利用によりて今や最後に成立したる勢力分配の狀態、即ち無意識的なる分配の姿と之に應じて定められたる意識的の分配の姿とを併せて、共に出來うる限度まで新なる意識的分配の形にとり入れる事につとめる。大體の點から、之を換言すれば（必ずしも精確の云ひ表ではないが）新に成立したる社會的勢力の分配狀態をば國家の組織によりて確乎に保障し、此狀態を刻々に再生産して變動なからしめる。比喩的に表現すれば一定時期に於ける國家の組織、勢力の分配關係、即ち一種の契約關係に對して（嚴密なる意味に於ける契約でない事は云ふまでもないが）公正證書の役目を演ずる。勿論勢力分配の姿の如何なる程度まで

が此公正證書の中に書き込まれるか、換言すれば、意識的分配の範圍に取り入れらるゝかは、社會の種々なる事情、特に文化の發達の程度に依存する事が多いけれども、それは今詳論しない。兎に角、此公正證書は將來の勢力分配をして強者の利益の爲に現在のまゝに止まらしめむとする、而してその書き替へを飽迄阻止せむとする。既存の國家の組織が公正證書たる性質を有つ點には疑なしと想ふ。此公正證書は固定的性質のものではあるが、多少の添削、改竄を許さぬものではない、勢力關係の消長に従ひて多少づゝ不斷にそれが行はれる。然れども社會的勢力の分配の姿が著しく變化する時は根本的變革を要求せられる。歴史の進行は底止する所はない。社會の分化はどこまでも進む。此分化は人口密度の増加を原因として行はれると思ふが、此點は今立入りて説明したいと考へて居らぬ。兎に角分化の著しき所に野生的勢力が成長し、之に伴ひて又公生的勢力の減耗が認められる。従ひて勢力分配の關係が或る場合に於て、著しく古き、固定的なる公正證書と合一しない、こゝに於て此證書は土臺からの書き替へを餘儀なくされる。階級組織の變革は實にかくして反覆せられる。私はなほ、國家と階級の組織との關係に就き、序ながらではあるが、極めて簡單なる考察を加へたいと思ふ。實は階級の組織に對して國家がどれだけの作用を有し得るか、即ち國家の階級に對する決定的意義如何と云ふ點は可なり重大なる問題である。一の立場の人に依りては次の如くに考へられる。階級にとりて國家は一切である、國家は社會の

一部分を包括する、從ひて階級も亦國家の一部分に過ぎず、國家の意志を以て其組織を改むる時階級も亦全然、而して此道行によりてのみ、變革せられる。然れども、此考の背後には形而上學的なる國家觀がある。此形而上學の見方をとらざる人々、少なくとも經驗科學の立場に止まれる私共に對してそれは何等の妥當性をも要求し得ない。然れども、國家の階級に對する全能力的意義を認むるものは必ずしも「國家即全體社會」的の形而上學的立場をとるものゝみとは限らない。純に經驗科學の立場に立つものゝ中にありても、國家を死滅せしむる時は階級も亦地上に跡をたつべしと見る見解の背後には、其意識するとせざるにと拘らず、これと相似たる者が潜むと認められないか。國家が階級支配の道具、機關であるとするのみならず、國家の存する所階級の必ず成立するが故に、國家を地上より消滅せしむべしとなす見解は國家の階級に對する決定的作用を是認するものであると思ふ。勿論無政府主義的乃至國家否認的理論は極めて雜多にして其證據とする所一様ではないが、中には明に此種の見解を含むものゝ存するを疑はぬ。然れども、私は此立場を是認しない。其理由は次に述ぶる所よりして明であらう。

私は思ふに、國家は階級に對して、決して、創造乃至變革の決定的作用を營み得る自發的能力能動的意義を有し得るものではない。然れども亦、單純なる無意識の傍觀者ではない。少なくとも多少の程度に於て階級の變動、その組織の上に立入りたる關係を有するものである。然らば此交渉の本質はいづこに存するか。答へて云ふ、國家の組織は階級間の關係の公正證書であり、國

家はじびる事なき公證人である。國家は自ら公正證書の内容たる契約を創造し變改する事はできない、而もこれを固定的ならしめ、強者の利益を安全に保障することは出来る。更に一步を進めなければならぬ。階級的なる社會的勢力關係があらゆる方面に亘りて國家の組織の中に公正證書の表現を見出す事は出来ぬ。詳言すれば、意識的分配の中に入られるものは必ず社會的勢力の全部にあらず無意識的分配に委せらるゝ數多の勢力がある。此等のものに關しては國家がたゞ傍觀者たるに止まり、何等立入たる交渉を有し得ない。これを外にして、國家が交渉を有する勢力の關係のみを眼中に置く。かゝる關係に關しても、國家は自ら如何なる勢力をも創始する事はなく又變改し得る所がない、それは公正證書乃至公證人が双方の意志より獨立に契約の關係を作り得ざるが如くである。社會的勢力の階級的關係はそれ自體に於て決定せられる、此決定せられるものゝ重要な部分が國家組織の姿に於て固定せしめられる。從ひて國家は此階級關係決定の一の傍觀者のみ、たゞそれが無關心なる傍觀者たるに止まらず、自ら立入りて固定せしむると云ふ役目を演じてくれる。更に進みて考ふれば、此固定と云ふ事柄が社會的勢力關係の上に幾分の影響なしとはしない。それは國家組織に於て確立せられたる勢力の分配を持續せしめる、それなくば消滅してあるべき勢力關係を残存せしめる。かくて、之なくば夙に没落してあるべき階級が支配者の地位を占むる事決して稀ならずとしない。然れども、このことは國家の自發的作用を意味するものに非ず、記されたる公正證書の文字が有する効力に等しく、階級相互の關係によりて「作

られたるもの」の作用を意味するに止まる。従ひて、社會的勢力の關係の變動著しく其成員が以前の契約をすて去らむと決意する時、此作用も亦消滅し終る。國家は傍觀者たる原則的地位より移るものではない。

國家が階級に對して有する影響はなほ他の二方面に亘りて認むることが出来る。一は勢力の集積、従うて其懸隔を顯著ならしむる事にして、他は無意識的分配の因りて行はるゝ前提を作る事である。此點に就いて今また多少の考察を加へたい。國家あるが爲に、優位にある階級の社會的勢力が現に見るが如くに増加し、従ひて階級的懸隔が現に見るまでに助長せられたることは否定すべき餘地なしと思ふ。若し國家（又はこれと同一の機能を營む社會）なかりしものとするれば、勢力の差等、そのある階級に於ける集積、共に今日の如くなるに先だちて、無意識的勢力分配の爲に破壊せられたであらう。蓋しこれは次の事を意味する。國家の組織によりて意識的に分配せらるゝに至れる勢力は、出來うる限り自己利用の機會を求めて、云はゞ其勢力元本を増加せしめる。而して増加したる勢力をば公生的勢力に轉化せしめる（この増加がどこまでに進み得るかは社會の量質的組立によりて決定せられる事、別に詳密なる考察を要しよう）此道行を考へ來れば國家が階級的懸隔の助長者として有する意義は沒し難い、若し、國家の組織、更に進みて云へばこれに取代るべき他の社會の強制的組織が全くないものとするならば、勢力關係は著しく異なれるものとなる。然れども、此事も亦、決して國家の公證人的地位を否定し去るものではない。國

家の組織が此助長的作用を發み得るのは階級間の勢力關係が豫め此組織そのものを是認し、其存立を認容して居るが故に外ならぬ。従つて其助長作用は間接に見來る時、勢力關係そのもの、作用である。階級關係の當事者が此組織そのものを否定する時、換言すれば野生的勢力を手中に握れるものが此組織そのものも破壊し去る時、國家は其公證人たる地位より斥けられて無力のものとなり、助長的作用は全然之を營む事を得ない。同様な事が無意識的分配の前提としての國家の作用に關しても亦述べられ得る。野生的勢力の生成その事は直接に何等國家の意志に負ふのではない。然れども、間接に國家の組織を前提とする事少しとせぬ。例へば、町人に於ける豪富の集積は所有權の制度を前提とし、今日勞働組合の團結また國家の法律に負ふ所なしとしない。國家組織の爲に此勢力の形成の阻害せられたる方面ある事、慣習風俗の如く國家の組織以外にありてもかゝる前提を見るべきものゝ存することは、今問題とするを要せぬと思ふ。テンニイスが國家を以てそれ自體利益社會にてありながら、他の一切の利益社會の前提なりと云つたのと相似たる考へ方を此場合に於ても試み得る。果して然らば國家が階級變動に於ける傍觀者とのみ、受動的要素とのみ見るべきや。は今敢て然りと云ふ、其理由如何。國家がかゝる前提たり得る所以は、一に勢力關係が其存立を認するが故のみ。若し、之を認容せず、公正證書が破毀せられ公證人としての國家の存立がせられるとせよ、即ちその前提そのものが失はれ、野生的勢力は全然異なる條件の下に形られる事となる。従ひて國家の組織と云ふ前提によりて野生的勢力の形

成が影響せらるゝ事は、決して國家と云ふ自發的因子によりて決定せられると云ふ事ではない。社會的勢力、從ひて勢力關係は國家以前に、國家の根柢に存する、國家組織の前提によりてその分配の影響せられるのは、云はゞ自己決定である。國家はそれ自體の力によりて決定的作用を營み得る何等の自發的勢力をも有しない。かるが故に云ふ、階級關係の存立變動に於ける國家の作用は飽まで一の傍觀者たるに止まる。

かくて、階級變動の理論的考察に於て中心的意義を有するものは此野生的勢力の形成である。而して私はその生起消長一に、社會成員の分化に負ふ事を述べた。而も此勢力關係の變動を生じ來るほどの分化は何によりて促されるかは重大なる問題である。經濟史觀の立場からは之を生産力の發達にありと云ふであらう。私は人々密度の増加その事に分化の根原があると見る。然れども此點については別に詳論の機會を得たいと考へる。

(附記)私はなほ進みて二の仕事を選げたいと思つてゐる。其一は茲に階級組織と稱したるものを階級構造と階級關係の二に分折し、以て前述の立論を更に精確ならしむることである。而して人々の量質的組立の二方面即ち量の方面と質の方面の何れが根本的重要さを有するかをば、是と聯絡せしめて決定したいと思ふ。其二は社會の野生的勢力の創造者たる(分化)の因りて來る所を更に立入りて考察する事である。此二の仕事も今の場合、之を後目に譲る外はない。